

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12958

研究課題名（和文）明治思想史における「政教分離」 国学・神道とキリスト教による解釈の比較を通して

研究課題名（英文）"Seikyo Bunri" in the History of Meiji Thought: A Comparison of Interpretations by Kokugaku, Shinto, and Christianity

研究代表者

齋藤 公太 (Saito, Kota)

神戸大学・人文学研究科・講師

研究者番号：40802773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期日本の思想史において「政教分離」を理解する際の基本的な解釈枠組みがどのようなものであったかを、国学・神道とキリスト教における「政教分離」解釈を比較することによって解明することを目的とするものである。明治期の言説について研究を行なった結果、「国家（国民）の元氣」や「正氣」を盛んにするための「教」をめぐる言説が、政教分離や信教の自由を含む政治と宗教の関係を理解する際の基本的な解釈枠組みの一つとして機能していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治期の政治と宗教の関係性を研究するには制度的な関係に焦点が合わせられがちであるが、制度を生み出した人々がどのような知の枠組みに依拠していたかということも重要である。その点で、政教分離などの政治と宗教の関係をめぐる解釈枠組みを明らかにした本研究の成果は、近代日本の政教関係についての今後の研究に資するものと考えられる。また、政教分離や信教の自由についての理解がそれぞれの社会の歴史的な脈に左右されるものとするならば、明治期の解釈枠組みについての本研究の成果は現代の問題について考える上でも役立てられるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the basic interpretive framework for understanding the "separation of church and state" in the history of Japanese thought during the Meiji period by comparing the interpretations of "separation of church and state" in the Kokugaku, Shinto, and Christian discourses. As a result of our research on the discourses of the Meiji period, it became clear that the discourse on "kyo" to promote "national (citizen) genki" and "seiki" functioned as one of the basic interpretive frameworks in understanding the relationship between politics and religion, including the separation of church and state and freedom of religion.

研究分野：日本思想史

キーワード：政教分離 信教の自由 近代日本思想史 近代日本宗教史 国学 神道 キリスト教

## 1. 研究開始当初の背景

戦後の日本において「政教分離」という問題は、狭義の宗教研究に留まらず、大嘗祭や靖国神社をめぐる議論に見られるように、現代の国家のあり方とも関わる大きな社会的意義を持つトピックであり続けた。

しかし実のところ「政教分離」という概念は、「国家と教会の分離」や「政治と宗教の分離」まで幅広い意味を含んでおり、一義的に定義できるものではない。また、宗教に友好的でユダヤ・キリスト教的な宗教性を「市民宗教」とする「アメリカ型政教分離」と、公的領域から一切の宗教性を排除しようとする「フランス型政教分離」があるように、「政教分離」の解釈も国によって異なっているのが実情である。要するに、「政教分離」は多義的な概念であり、それをどのように解釈するかはその国ごとの歴史的な文脈に左右されるのである。とりわけ「ポスト世俗時代」と言われるように、世俗化論が自明の前提ではなくなった現代においては、「政教分離」概念の歴史性がいっそう露わとなりつつある。

以上の状況においては、政教分離の概念を規定している各地域の歴史的な文脈を問い直すことが必要となる。その点で近代日本における「政教分離」概念の歴史は重要な意味を持つ。なぜなら近代日本は西洋諸国から政教分離の理念を輸入しつつも、天皇や神道といった政治と宗教の境界に位置する「伝統」を同時に抱え込んでおり、それらと政教分離原則を整合させるという難題に直面し続けたからである。こうした複雑な文脈のもとで形成された近代日本の「政教分離」概念の歴史を改めて見直すことは、「政教分離」の歴史性が問い直されつつある現代の宗教研究において大きな意義を持つものである。

そこでとりわけ近代天皇制や神社非宗教論に基づく「国家神道」が確立された明治期において、「政教分離」がどのような思想的文脈の中で解釈されたかが重要な意味を持つことになる。したがって、明治期の日本人が「政教分離」をどのように理解していたのか、その根底にある基礎的な解釈枠組みはどのようなものであったのかということが解明すべき重要な問いとして浮上するのである。本研究はそのような問いに取り組むものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、明治期日本の思想史において「政教分離」を理解する際の基本的な解釈枠組みがどのようなものであったかを、国学・神道とキリスト教における「政教分離」解釈を比較することによって解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は上述の目的を、具体的には以下の研究を実施することによって達成することを目指した。

(1) 明治期の代表的な国学・神道関係人物が近代天皇制と神社非宗教論に基づくいわゆる「国家神道」のもとで政教分離をいかにとらえていたかを明らかにする。

(2) 明治期キリスト教徒の代表的思想家が国学・神道の側からの批判に応えつつ、近代西洋由来の政教分離の理念により日本の政教分離をどのように理解していたかを解明する。

(3) 上記(1)と(2)の成果をふまえ、国学・神道とキリスト教の双方が立脚している明治期日本の政教分離についての解釈枠組みを明らかにする。

## 4. 研究成果

第一年次(令和元年度)は研究協力者を任用し、研究史整理と「政教分離」や「信教の自由」などに関わる文献のリスト化を進めた。また本研究の成果発表のためのウェブサイトを立ち上げ、文献リストを公開した。さらに本研究で取り上げる人物についての選定と文献収集を行い、国学者・池辺義象についての論文も執筆した。それにより、明治期以降の国家の世俗性を前提とした祭政一致論の特質が明らかになった。

第二年次(令和2年度)からは、上述の解釈枠組みを理解する上で重要なナショナリズムの問題や、「信教の自由」との関係性も視野に入れ、「キリスト教とナショナリズム」研究会とも連携しつつ、前年度に選定した人物について研究を進めた。すなわち明治期のキリスト教思想家、とりわけ植村正久における「信教の自由」とナショナリズム、神道観の関係について、また小崎弘道の「政教分離」解釈と政教関係論に関して研究を進め、その成果に基づき研究発表を行なった。また同時代の海老名弾正や内村鑑三についても研究を進めた。それらの研究、とりわけ小崎に関する研究を通じて、彼らがおおむね共通に有していた「国家(国民)の元気」や「正気」という概念の重要性が浮上した。

また国学・神道関係に関しては、明治期の政教分離について考える上で重要な国家神道と教派神道の関係性を対象に、国学者・井上頼圀の動向を中心にすえて研究を行い論文を執筆した。この論文では、「国家神道」による政教分離・信教の自由の侵害や「教派神道」の抑圧という単純な図式に当てはまらない明治期の状況を、井上頼圀を軸とする教派神道の独立過程から明らか

にすることができた。また明治期の延長線上の問題として、国学と真宗の思想との結合を試みた昭和期の仏教者・暁烏敏についても比較対象として研究を行い、この成果も論文としてまとめた。

最終年次にあたる令和3年度では、これまでの研究成果をふまえ、上述の解釈枠組みを明確な形で提示することを目標とし、その成果に基づき学会発表も行なった。またなお、ウェブサイト上でもその内容を公開した。以下に内容を要約する。

明治期において政治と宗教の関係の理解を規定していた枠組みの一つとして、「教」をめぐる言説を挙げるができる(磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店、2003年、渡辺浩「「教」と陰謀」「国体」の一起源」、『明治革命・性・文明』所収、東京大学出版会、2021年等を参照)。先行研究が明らかにしているように、明治期には「教」が宗教的なものと倫理的なものを包摂する領域として理解されており、その背景には近世の儒学や国学の潮流が存在していた。たとえば荻生徂徠は「道」を社会統治のための制度としてとらえ、その思想は後期水戸学に受け継がれた。後期水戸学では「人心」の働きが注目され、人々の心的エネルギーを表す「元氣」や「正氣」といった概念が用いられるようになる。後期水戸学を代表する会沢正志斎や藤田東湖の著作は、幕末維新期の政治過程のなかで全国的に普及し広く読まれた。

明治維新後の不安定な政治状況の中で、「人心」に対する関心と水戸学の受容が相まって、明治期には「国家(国民)の元氣」や「正氣」をめぐる言説が普及し、国家と政治について語る際の大きな枠組みになった(原島正「小崎弘道の「国家の元氣」論」、『東洋英和女学院大学短期大学部 研究紀要』34号、1996年1月、伊藤彌彦『維新と人心』東京大学出版会、1999年、宮里立士「明治日本の「元氣」」北村透谷「国民の元氣」論を通して」、『成蹊人文研究』6号、1998年3月など)。そのようななかで、国民の統合や「元氣」「正氣」の振作に有効な「教」をめぐる議論が起こり、明治20年代頃まで続くことになる。その背景には「人心を満足拾収す可(べ)き宗教」がない「大空虚」(小崎弘道「真正なる宗教の必要」、1883年)であるとの現状認識があった。

しかし明治期における「教」の言説は、近代的「宗教」概念の導入や「国教」をめぐる議論、「神道」的国民教化の挫折といった明治前期の歴史的要因により変化を被らざるをえなかった。その結果、明治政府は「国教」を制定せず、「宗教」と「道德」を分け、一定の制限を設けつつ信教の自由を認めるという方針を採用するに至る。

以上の状況をふまえて明治期プロテスタントのキリスト教思想家の言説を目を向けるならば、そこには明白に水戸学の影響が見られ、またそれにともない「国家(国民)の元氣」や「正氣」を振作するための「教」という言説も受容されていたことがわかる。

とりわけ植村正久や小崎弘道、海老名弾正といった人々のテキストからわかるのは、これらのキリスト教思想家が明治憲法制定前後の時期において、国民の「元氣」や「正氣」を振作し、なおかつ近代社会に適した「教」としての有効性を主張してキリスト教を広めようとしていたことである。それはキリスト教を国教にするというよりは、信教の自由・政教分離を前提とした上でキリスト教を国民間に広め、ある種の「市民宗教」化することを企図したものであった。したがって不敬事件への対応に見られるように、彼らは「宗教」と「道德」を明確に分け、「宗教」の強制による信教の自由の侵害に反対した。こうした立場は神道的な儀礼の強制を批判するものだったが、「神道」をある種の精神的なエートスとして捉える場合は、むしろそれが日本国民におけるキリスト教受容の基盤となると解釈する可能性もあった。

以上のように明治期以来のキリスト教思想家においては近世以来形成された言説によって、政治と宗教の関係をとらえる際の思考が方向づけられていたことがわかる。ただし、内村鑑三の「日本人と基督教」(1907年)に見られるように、「教」の言説そのものへの疑問、「宗教」を政治的有効性から捉えようとする視点そのものへの批判も存在していたことにも留意すべきであろう。

以上のように本研究は、明治期の政治と宗教の関係を理解する際の基本的な解釈枠組みと考えられるものを明確に提示した。それは政教分離や信教の自由のもとでの政治と宗教の関係を理解する際にも適用されうるものであったために、国学・神道側だけではなく、キリスト教思想家によっても共有されえたのであった。

なお、第三年次は内村不敬事件についても研究を進め、平田国学とキリスト教の関係についても論文を執筆したが、同論文を含む論集は近刊の予定である。

また令和2年度からは新型コロナウイルスの影響もあり、研究協力者の任用が困難となったが、適宜研究計画を修正し、海老名弾正の著作のデジタルテキスト化を進めた。令和3年度も新たなテキストを上記ウェブサイト追加した。海老名弾正は植村正久や小崎弘道、内村鑑三といった他の著名なキリスト教思想家とは異なり、全集・著作集の類がまだ刊行されていないため、このようなデジタルテキストの公開は本研究に役立てられるのみならず、今後の海老名研究に資すると考えられる。

これまでに発表してきた論文も含め、以上の成果は明治期の政教分離や信教の自由を理解する上で、従来では十分に論じられてこなかった解釈枠組みの存在を明確な形で提示しており、今後の明治期の政教関係についての研究においても参照されるものと考えられる。研究期間中には間に合わなかったが、最終的な研究成果に基づいて論文を執筆し、今後発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齋藤公太
2. 発表標題 「植村正久とナショナリズム 「神道」と「信教自由」をめぐる」
3. 学会等名 第1回「キリスト教とナショナリズム」公開研究会「明治期の「信教自由」とキリスト教・神道の交錯」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤公太
2. 発表標題 「小崎弘道における政治と宗教」
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤公太
2. 発表標題 明治期キリスト教思想家の言説における政治と宗教の関係
3. 学会等名 第16回キリスト教史学会西日本部会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石井公成監修、近藤俊太郎・名和達宣編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 572
3. 書名 『近代の仏教思想と日本主義』	

1. 著者名 島園進・末木文美士・大谷栄一・西村明編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 260
3. 書名 『近代日本宗教史 第二巻 国家と信仰』	

1. 著者名 國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集	4. 発行年 2020年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 743
3. 書名 『近代の神道と社会』（齋藤公太担当章「池辺義象の日本法制史研究と祭政一致論」、pp.271-294）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「明治思想史における「政教分離」」成果公開サイト <a href="https://sites.google.com/view/seikyobunri/">https://sites.google.com/view/seikyobunri/</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------